老いが忍びよる…

小城ゆり子

老いが忍びよる…

小城ゆり子

敬老の日

七十一歳になる夫に、敬老のお祝い会の招待状が来た。主催者は地区の社協（社会福祉協議会）である。
「どう？　行く？」
「行かない」
「おいしいお弁当も出るよ。ちょうどゴルフのない日じゃない」
「行かないよ」と夫はにべもない。
お祝いは七十歳以上だから、六十五歳の私のところには来ない。来ないでよかった。よりによって「敬老のお祝い」だなんて！　ぞっとする。まだ私は自分が老人だという覚悟が足りないのだ。
九月二十日、敬老の日の前日、団地の自治会館でボランティアの主婦たちが大勢立ち働いていた。二十一日当日は、早朝から働いていた。朝、公園にゴルフの練習に行った夫が言う。「みんな、朝早くから働いていたよ」
「敬老のお祝い弁当を作っているのよ」
「へえ、あれがそうなの」
「そう。いつもは、月に一回、老人を招いてお食事会をしているのよ。あと、今日のように行事がある日と。団地の老人たちに喜ばれているって評判で、自慢なのよ」
この地区の社協は、うちなどは年に二百円しか会費を払っていないけれど、けっこう活発にボランティア活動をしている。
それにしても、「敬老の日」なんて…。
まだ老人の仲間入りはしたくない私だが、老いは容赦なくやって来る。
買い物をしようと歩いていたら、目の前に髪の毛みたいなのが丸く輪になってぶらさがっている。手で払いのけようとしたが、できない。いくら払いのけても、消えない。髪の毛やゴミではないのだ。そこにあるはずのないものが、見えてしまうのだ。飛蚊症か…。
最近、目が疲れやすい。パソコンをしていたり読書したりしていると、目に涙が滲んでくる。ドラッグストアで「疲れ目にいい目薬ない？」と聞いて買ったが、その目薬、家に帰って開封してみたら、「緑内障と診断された人は使わないように」と注意書きがあったので、怖くなってやめた。私は以前、眼科で「将来、緑内障になる恐れがある」と言われたことがあるのだ。
しかし、目に見えるはずのないものが見えるのは、おかしいではないか。眼科に行きたい…だが、日曜日、敬老の日、国民の祝日、秋分の日、と続く連休（シルバーウィークというのだそうだ）で、医院は休診。近所のＦ眼科は連休明けの木曜日も休診である。金曜日は…二十五日金

曜日はカルチャーセンターの「ユーモア文芸教室」があるのだ。でも、それは午後一時からだから…いつもはカルチャーセンターのある日は、午前中、家事以外はしないでいる私なのだが、ここはひとつ時間をやりくりして、眼科医を受診してみるか…。

Ｆ眼科へ行って、いったん家に帰ったりせずに、昼食もその近くでとって、そこからバスで直接カルチャーセンターへ行けばいいわけだ、と思って、朝早く、支度して出かけた。

診察の順番は早くきた。ところが、看護師が瞳孔を開く目薬をさしてくれても、なかなか開かない。何度もさして、一時間以上かかって、やっと先生に診てもらえた。

「飛蚊症のほかに、白内障もありますね」と先生が言う。

「この目薬、さしていいですか？」とドラッグストアで買った目薬を見せたら、即座に

「そんなもの、さしても効きませんよ」と言われた。

「目薬をください」

「どんな目薬？」

「パソコンや読書のときに、目が疲れるんです」

「そう。じゃ、白内障の目薬も出しておきましょう」

結局、目薬を二種類もらった。

一日五回さす…五回もさすって、けっこう大変だ。忘れないようにしないと。

白内障もあるって…これで緑内障も発症したら…？　どうすればいいのだろう？　作家をめざす者にとって、目は命ではないか。年をとってから作家をめざすのは、いろいろな意味で大変なんだなと、わかった。

いずれにしろ、くよくよしても始まらない。診察が昼近くまでかかったので、喫茶店でそそくさとサンドイッチを食べ、急いでバスに乗って、カルチャーセンターへ行った。

二、三日、私は気持ちが塞いでいた。年をとればいろいろな病気になる。乳ガンはどうだろう？

十月になったら乳ガン検診を受けよう、と決めていたのだ。子宮ガンの手術をしてから十一年たつ。「子宮ガンになった人は、乳ガンにもなりやすいから、気をつけるように」とかねがね言われていた。

週がかわって、九月二十九日、近所のＧ乳腺外科に行く。検査の間、どきどきする。またまたガンだったら、どうしよう…。

「大丈夫ですよ、正常です」と医師がにこにこして言った。

ありがたかった。

これで少し気持ちが晴れて、外へ出る。残念ながら空は晴れていない。雨が少し降り始めている。でも、良かった。

老人の日…私も十月六日には、六十六歳になるのだ。

「生老病死」…お釈迦様の言う、人間の四つの苦しみ。

老いの苦しみ。明るくしていても、老化はまったなしにやってくる。

六十六年間も、うかうかと人生をすごしてしまった。残りの人生をきちんと生きなければ。後悔のないように。

でも、七十歳になって、社協から敬老お祝い会の招待状が来たら…嫌だなあ、と思う。「敬老

の日」なんて、なければいいのに。

六十六歳の誕生日

十月三日（土）
　今日はユーモア教室の皆と「笑点」を見に行く。それは楽しい一日のはずだった。
　ところが、水道橋から帰りの電車に乗って、秋葉原でこれから浅草へもんじゃ焼きを食べに行くという皆と別れ（私は夫のために夕食の支度をするのが気になって、とても皆と会食する気になれなかった）、錦糸町で快速電車に乗り換え…
　と、突然、
　左足が痛んだ。
　左の膝の裏のところが、ぎーぎーと痛い。
　ホームの階段をやっとのことで降りて、あがって、ちょうど来た電車にやっと乗って…
　足をさすっていたら、若い女性が席をゆずってくれた。
　それで救われたが、まだまだ左足が痛い。両手でさすっても、痛い。錦糸町から稲毛まで、足をさすっていた。
　稲毛駅で降り、バス停に行き、ちょうど停まっていたバスに乗り、三つ目のバス停で降り、痛い足をひきずり、ひきずり、家に向かって歩く。十分ほどで着く家までの距離が、はてしなく長く感じられた。
　夕食は、ちょうどうまいぐあいにすきやきの材料を買ってあったので、それを切って出す。後は夫がやってくれた。

十月四日（日）
　足が痛い。膝の裏側が痛い。しかし、今日は日曜日…医者に行くのは明日まで待つしかない。
　歩けない。家の中でも、自由に歩けない。料理も、夫が台所に椅子を出してくれたので、それにすわってやる。足腰の不自由なお年寄りの気持ちが、少しわかってきた。それにしても、早く月曜日になるといいのに。

十月五日（月）
　駅前のＡ整形外科に、夫が車で乗せていってくれた。それはいいのだが、「おれも行くから」と言うので、夫も整形外科に行くのかと思った。以前、彼もそこへ行っていたのだ。
　で、私がＡ整形外科に入ったら、夫は出て行く。車を置いてくるんだろうと思った。
　ところが、待てど暮せど、彼は来ない。なぜか？
　私が順番を待って、レントゲンを撮ってもらい、診察してもらい、リハビリしてもらったら、彼がやっとやって来た。
「あなた、診てもらわないの？」
「いや、おれはいいから」

「あ、あなたは接骨院に来たの」
　彼は、いつも、Ａ整形外科の近くのＢ接骨院で膝のマッサージをしてもらっているのだ。ゴルフ大好き人間の彼は、ゴルフで膝を痛め、Ｂ接骨院でマッサージしてもらいながらゴルフ場に通っているのだ。
　また彼は出て行った。
　私は受付で支払いを済ませ、処方箋をもらった。薬局はすぐ隣にあると言われたが、このまま薬局に行ってしまうと、夫は私の居場所がわからなくなるのではないか…。困っていると、また、彼がやって来た。
「薬をもらわないと」私は言って、二人で薬局に行く。
　また彼は先に行こうとする。
「どこへ行くの？」と聞くと、彼は医院の方を指差す。あ、夫もやはり整形外科で診てもらうのか…。
　だが、薬をもらって外を見たら、すぐ前に夫の車が見えたので、あ、車をＢ接骨院の駐車場から運んできたのか、とわかる。
　で、車に乗せてもらい、家に帰った。
「整形外科の先生が、骨が変形しているとか、水がたまっているとか言うの。歩くの、つらい。買い物に行くのも、帰りに重いものを持つのが大変で」
「いいよ、おれもビールを買うから。先に行ってろよ。後から自転車で行くから」と彼が言う。
「フローリング掃除用のシートもなくなったので、いるんだ」
「それはスーパーの二階に売っているわ。食料品のついでに買ってくるわね」
　で、夫と別れて、家のすぐ近くにあるスーパーの二階でそれを買い、一階に降りて食料品を物色する。階段の上がり降りはつらいので、エレベーターで行く。
　しかし、夫は来ない。ビール売り場を見渡したが、来てない。いったいどこに？　と思いながらレジへ行ったら、そこへのこのこと彼、やって来た。
「カード」と言うので、この店のポイントカードを渡す。
　彼は行きかけて、また戻ってきて、「財布を持って来なかったんだ」と言うので、お金も渡す。
　先日、一緒にここに買い物に来て、レジの外で彼が「待っているから」と言うので、買い物を済ませ、レジの外へ出ても、彼はどこにもいなかった。
　何か物色しているのかと思って、売り場の中をあちこち探したが、いなかった。二階に行ったのかと思って二階に行っても、いない。また一階に降りて、店の公衆電話から彼の携帯に電話しても、応答無し。家に帰ったのかと思って、家に電話しても、るす。
　なんだ、先に家に帰ろう、と思って、店の外に出たら、彼が外の自転車置き場にいた。
「なんだ、パパ、外にいたの。中かと思ってあちこち探したのに」
　夫は言葉が足りないのだ。外で待っているなら、そう言えばいいのに。
　今日もまた行き違いになるかと思い、レジの近くを見たら、彼がビールを買っていたので、そこへ行き、おつりとカードを受け取る。
　荷物を彼に持ってもらい、家に帰る。

十月六日（火）
　いよいよ私の六十六回目の誕生日だ。お祝いなんかしない。誕生日など、ちっともめでたくない。
　亡くなった母は、「年をとったら、誕生日は、毎年、お祝いだ」と言っていたが、ああ、これで六十六歳まで生きられたのか、と感慨にふけるほど、私は達観していない。まだまだ若いつもりでいたのに…。どこからか、老いは忍びよってくる…。
　膝が痛くなって、年をとって身体が不自由になるってこういうことか、と初めてわかる。友だちが「足が痛いの」と言っていたのを、私はよく理解していなかった。そうだ、足が痛いとは、こういうことだったのだ…。
　買い物に不自由なので、生協の宅配に入ることにした。「生協なんか素人の集まりだ」と言って生協を嫌う夫に、宣言する。「もう、生協に入りますからね。牛乳だのじゃがいもだの持って重い目をするのは、嫌ですからね」
「スーパーも配達すればいいんだ。ポイントカードなんかやらなくていいから、配達すればいいのに」と彼。
　年をとるということは、身体が不自由になるということだった。初めて、思い知らされた。

　　わが家のゴミ戦争

　私たちの千葉市では、今、可燃ゴミ（焼却ゴミ）三割削減運動なるものをやっている。古紙や布類は可燃ゴミには出さず、資源として再利用するというものだ。古紙…新聞紙、ダンボール、雑紙等。私は市に協力し、食品の入っていた紙箱などは、すべて解体し、雑紙として出してきた。月に二回、古紙回収車がやってきていた。
　ところが、他の人たちは、なかなかこれに協力しない。市が何度も市政だよりやチラシで呼びかけているのに、古紙を資源として出そうとしない。みんなひっくるめて可燃ゴミとして簡単に出しているのだ。業をにやした市当局は、とうとう、可燃ゴミの収集を週三回から二回に減らした。この地区は、可燃ゴミ火、木、土、の三回から月、木の二回に代わった。その代わり、月、木は祝日であっても、ゴミを収集してくれる。古紙、布類の回収は、月二回から週一回に代わった。もともと、ゴミは資源ゴミとしてすべて回収するべきものである。
　で、木曜日から次の月曜日まで、四日間も間がある。四日間もたまったゴミをどうするか…。
　日曜日、夫が台所を整理していた。「ゴミは出しておいたからな」と言う。
「えっ？　ゴミ出しは明日ですよ。前日に出してはいけないんですよ。カラスがあさるでしょ」
「大丈夫だ」
「大丈夫じゃありません。この頃のカラスは、鳴き声もたてずにやってきますからね。前はカーカー鳴いていたけれど、それでは人間が注意するとわかって、最近は声もたてずにそーっとやってくるんです。前日にゴミを出すなら、カラスネットをかけないと」
「大丈夫だってば」

「ダメ」
「ぐずぐず言うなよ。自分は何もやらないくせに」
「ゴミは、明日の朝、出せばいいんです」
　私は頭にきて、カラスネットを出しに外へ出た。
　ゴミは…？　何もない。
「あなた、ゴミはどこへ出したの？」
「ベランダだ」
「えっ？　ベランダ？」
　確かにわが家のベランダに、袋に入ったゴミが置いてあった。
「ベランダに置いたの。それなら、どうしてベランダに出したって言ってくれなかったの？　外のゴミ置き場に出したって思ったじゃない」
「外に出すわけがないじゃないか。外に出すなら、カラスネットをかけておくよ。それぐらいのことはするよ」
「だって、あなたがちゃんと言わないから。今、見に行かなければ、明日の朝、早朝あなたはゴルフに行ってしまい、後に残った私は、もうゴミは外に棄ててあるからいいって、ベランダに置いてあるゴミに気がつかず、ごみ出しせずにいたかもしれないじゃない。ほんとに、あなたって、言葉が足りないのね。どうしてそんなで出世できたの？　会社の人たちは、私なんかと違って、あなたが一を言えば十をわかる人たちだったのね」
「そうだよ。おれは会社で、お前たち、おれが一を言えば十をわかるようにって命令していたんだ」と夫は言う。彼はその調子で、管理職になり、取締役にまでなったのだ。どうしてそこまでいけたのか、私は不思議でしょうがない。
　いつも、ものごとをきちんと言ってくれず、くわしく聞くと怒る。ほんとに困りものの夫である。私は彼の部下だった人たちみたいには頭が切れないのだ。

　　喪中はがき
　　――兄姉四人逝く――

「今年は年賀状、出すの？」と夫に聞いたら、
「出さない」という返事。
「そう、じゃあ、喪中はがきを出すのね？　兄弟が亡くなった場合は、喪中はがきは出さなくてもいいんだそうだけれどね。今年は特別だったからね」
　しかし、どんなデザインにするか？
　近所のスーパーから見本をもらって、選んでみた。
「ね、これなんか、どう？」と聞いても、
夫は「いいよ、なんでも。任せるから」と言って、見ようともしない。
　はりあいもない。
　それでも、はすの花のデザインのを頼んで、印刷してもらった。

喪中につき
年頭のご挨拶は
失礼させて
いただきます

本年中に賜りましたご厚情を深謝いたします
みなさまにはどうぞ良いお年をお迎えください
平成二十一年十一月

と印刷してあるのに、夫の分のはがきはそのまま、自分の親戚や友人に出すのは、手書きで空欄に書き加えた。

森田家では、夫の兄姉が四人、次々と他界しました。
来年こそ良い年でありますよう！

全部書いてから、こんな不吉なことは書かなければよかったかな、と思ったが、後の祭りである。
四人の兄姉…夫の姉、その夫、兄、未亡人の兄嫁、の四人である。夫は九人兄弟の末っ子なので、次々と兄姉を見送らねばならないのは、覚悟していた。しかし、今年は特別であった。
三月、義兄橋本谷平（義姉房子の夫）が、九十六歳で亡くなった。病気の義姉を老々介護していたのだが、自分が先に亡くなった。夫たちは、入院中の義姉に、義兄の死を隠していた。彼女が力を落としてはならないと…。
しかし、四月、ちょうど一月後に、その彼女も亡くなった。
お葬式には、ガン手術したばかりの兄嫁も、病院から駆けつけてくれた。義兄幸造はとうに亡くなり、未亡人の兄嫁は二人の遺児を育ててきた。今はガン手術後で、ものも食べられない状態なのだ。
「大丈夫なの？　そんな身体で出歩いても？」と、皆、心配したが、
「大丈夫。ガンなんかには負けないわ」と彼女は元気であった。
夫は七男だが、そのすぐ上の兄、六男の義兄徹もガン手術中で、来られなかった。彼は橋本夫妻の遺言執行人なのだが、病気で、それができない。で、私の夫が代わりに相続人代表者になって、相続の事務手続きをした。
その最中、五月にその徹が亡くなった。
徹の一人息子達夫は、無宗教の家族葬、というのを選んだ。音楽が流れて、義兄の一生が語られ、しみじみと心に残る葬儀だった。
橋本夫妻の遺産のことだが、法律上、義姉の亡くなったとき、森田徹はまだ生きていたので、相続の権利はその妻芳子と息子達夫に遺された。四男の義兄幸造は、三十年前に亡くなっているので、その相続権は、兄嫁にはなく、二人の息子に遺された。

橋本夫妻は、貧乏なつましい暮らしをしていたが、亡くなった後、財産を調べたら、一億円近くもあった。子供もないので、遺産は房子の姉弟が継ぐことになる。
証券会社に遺された橋本夫妻の遺産を相続するのは、手続きが大変だった。なにしろ、法定相続人が十人もいるのだ。印鑑を貰うのも大変だったし、何より遺言執行人の徹が病気療養中から亡くなったので、ことが面倒だった。夫は面倒なことを自分一人でしなければならず、ぶつぶつ文句を言っていた。
幸造の遺児二人の印鑑も貰わねばならず、夫は未亡人の兄嫁のところに出かけた。遺児二人のうち、長男太一郎は岡山に単身赴任し、ホテルの支配人をしている。次男善次郎は、腕のいいカリスマ美容師だが、資産家目当ての高級美容院が、不況のあおりを食って倒産し、ものすごい借金をかかえている。房子の遺産も、善次郎の方は借金返しに使ってしまうだろう。太一郎の方はどうか？
「遺産が入ったら、お墓を買うそうだ。兄嫁さんが喜んでいた」
と夫が言う。
「そう。義兄さんのお骨も、長い間、本家のお墓に預けたままになっているもんね。お墓が買えたらいいわね」
長い年月、兄嫁はお墓どころでなかった。義兄幸造がガンで亡くなり、遺された二人の息子を育て、教育するのに、精一杯だった。もともと専業主婦だった彼女だが、義兄の死後は金融機関に勤め、定年退職後もマンションの管理人をしていた。必死に生きてきたのだが、病魔は許してくれなかった。
六月、夜、思わぬ電話がかかってきた。
「もしもし、森田太一郎ですが」
「えっ？」
なんで太一郎から電話が来るのか？
「母が危篤で」
「まあ！」
兄嫁が、危篤という…。
「ぼくは今、岡山から東京に帰るところなんですが」
「そうですか。本家にも言っておきますね」
太一郎は、本家の電話番号など知らないのだろう。だから、遺産相続の件で知っていた我が家に電話してきたのだろう。
兄嫁は、先年手術したところが壊疽になってしまったという。
まもなく、葬儀となった。
そして、納骨。
「四、五年預かってくださいって言うのね。四、五年だなんて、四、五十年にもなりそうね」と本家の兄嫁が文句を言う。太一郎たちは、母親のお骨も、本家の墓に預かってもらうことにしたようだ。兄嫁はお墓を買うと、喜んでいたのに、買う前に亡くなってしまい、また預けられて…息子たちの親不孝を見ているような気がする。

　徹の納骨もあった。
「本人が、地下に埋められるのはいやだ、樹木葬などがいいって言っていたのね。樹木葬ってのも難しく、でも、本人が嫌と言っていたのにするのもねえ」と芳子は言い、新しい公園墓地に葬ることにした。ここは、地下ではない。
「これは、夫婦のお墓なの。私も、死んだら、ここに入るから」
　見ると、もう芳子の名前まで彫ってある。この家族は、ハイカラさんだった。
　納骨と言えば、遺産を遺してくれた橋本夫妻の納骨は、すでに、檀家であったお寺のお墓に、私の夫が頼んで、永代供養してもらってある。子供が一人もなく、子孫のない夫妻である。
　葬儀、納骨、と忙しかった今年も、もう少しで終わる。夫の兄姉には、まだ病気で高齢の人たちが多い…だが、来年は、喪中はがきなど出さなくても済む年であってほしい、と心から思う。

　　膝が痛い…

　十月三日に東京に行った帰り、膝を痛めてしまって、この一月、ずっと療養を続けてきた。
　左足の膝が痛くて、歩けない。じっとしていても、寝ていても、痛い。泣くに泣けない思いだった。台所仕事をするのも、大変だった。
　十月五日（月曜日）に、Ａ整形外科に行き、レントゲンを撮ってもらい、骨が変形していると言われ、痛み止めの薬をもらって来た。薬を飲んだら痛みも軽減したので、もう良いかと思い、一週間、リハビリにも行かず、家にいた。金曜日にはカルチャーセンターのユーモア文芸教室に行った。千葉までバスで行ったのだ。我ながら無謀なことをしたもんんだと思う。
　痛み止めの薬がなくなって、また痛み始めた。日曜日、月曜日（体育の日）と休日が続く。火曜日、とうとう耐えられなくて、近所のＣ接骨院へ行く。歩いて十分ほどの距離なのに、杖をついて歩いて三十分もかかる。足が痛い…自由に歩けない。短い距離が果てしなく長く感じられる。Ｃ接骨院の先生は、膝に電気を当て、テープを張ってくれた。膝の動きを正常にするためのテープだそうだ。一週間、Ｃ接骨院に通った。でも、治らない。
　水曜日、津田沼の精神科、Ｄ病院へ行く。私は双極性障害という病気があり、精神科で安定剤をもらっている。しかし、この日は、病院まで行くのが大変だった。ＪＲの駅まで夫が車で送ってくれたが、ＪＲに乗り、津田沼で降りて、階段をやっとこさ降りて、バス停に行く。バスで病院へ。
　先生に膝を痛めて痛いことを告げるといつもの安定剤を減らしてくれた。
「足の痛みとは関係ないですよね」
「安定剤を減らしていくと、そういうのも良くなるようですよ」
　あぁ、そうなのか。
　薬局で薬をもらい、後はタクシーで津田沼駅へ行く。ＪＲとバスを乗り継いで家路につく。
　木曜日、カルチャーセンターの小説教室に行った。行きは千葉駅からカルチャーセンターまでタクシーで行ったが、帰りはバスで家の近くまで来た。バス停から家まで、ふだんは十分程度の距離なのに、この距離が長い。杖に頼って、やっと歩く。苦しかった。自分のエネルギーを全部使ってしまった。

やっと家にたどり着き…。
夫が何もしないで、のんきにしている。憎らしい。私の具合が悪い時くらい、手伝ってくれたっていいじゃないか。
居間から台所まで行くことも、苦になった。狭い家の中で、ちょっと動くことも苦しい。
夫に頼んだ。「ねえ、冷蔵庫の中にカレーができているから、それを鍋に入れて温めて、ここまで運んでくれない？」
「そんなこともできないのか！」夫が怒った。
「そんな…それぐらいしてくれたっていいじゃない」
「それもできないなら、出かけなきゃいいじゃないか。小説教室には出かけて、そんな仕事もできないなど。ぐずぐず言うくらいなら出かけなきゃいいんだ」
「そんなこと言わないで。少しはやってくれたって、いいじゃない」
「病気になったら、介護してやるよ。具合が悪いなら、出かけるなって言っているんだ」
理解がない。自分は足や腰が痛くてもゴルフに行っているのに。
それでも、夫は、カレーを温めて出してくれた。
金曜日、私は近所のＥ内科に行く日なので、夫に車で送ってもらった。一月に一回、内科に通って高血圧と骨粗しょう症の薬をもらっているのだ。ここで、膝が痛いことを告げ、痛み止めの薬ももらった。
処方箋をもらって、薬局に行ったら、薬剤師に言われた。
「膝が痛いなら、整形外科に行かなきゃダメですよ。接骨院の技師は医者じゃありませんよ」
「だって、整形外科に行っても、リハビリするだけでしょ」
「そんなことないと思いますよ。ちゃんと治療してもらわないと」
「治療って何ですか？」
「手術とかです」
手術？　何か、恐ろしい。
薬局から夫に電話して、また迎えに来てもらう。
次の週の月曜日、再びＡ整形外科に行った。
「膝の痛いところが移るんです。初めは膝の裏が痛かったけれど、冷やしていたら、そこはよくなって、次は膝の左側が痛くなって、そこも冷やしてよくなったけれど、今は膝頭が痛いんです」
「そうですか。リハビリして、筋トレもしましょう」と医師が言う。
リハビリの技師が、何をやるか説明してくれた。電気器具などを使う。筋トレの仕方も教えてくれた。
一週間、整形外科にリハビリに通った。だんだんよくなってくる。行き帰りは夫が送ってくれた。彼も、この近くのＢ接骨院に通っているのだ。帰り、家の近所のスーパーに寄って、買い物をする。生協の宅配が始まったので、スーパーでの買い物が少なくなり、助かった。
「痛み止めの薬を飲んでいるからって、無理をしてはダメですよ」
と言われたので、十月第四金曜日のユーモア文芸教室は休む。これは休んだが、目薬が少な

くなったので、眼科には行かなければならない。夫は早朝からゴルフに行ってしまった。で、タクシーでＦ眼科へ行く。この前、左の目を診てもらったが、右の目もおかしいので、診てもらう。右も、左と同じく、飛蚊症と白内障があると言われた。診察が終わり、薬局から目薬をもらって、またタクシーで整形外科に行く。リハビリは毎日続けるといい。またタクシーで家へ。
　しかし、私は、各種の医者にばかり行っていることになる。
　土曜日から次の週、またＡ整形外科に日参する。十月いっぱいでかなりよくなった。
　膝が痛くなって、おおげさに言えば、人生観が変わった。これまでは、老いが忍びよるってどういうことか、わかっていなかったのだ。身体は自由で当たり前と思っていたのに、年をとったら、不自由になった。変形性膝関節症というのだろうか？　そんな病気、自分には関係ないと思っていたのに。
　今回の痛みはどうやら無事過ぎそうだが、またいつ何時痛み出すかわからない。でも、そんなことを恐れていても、しようがない。怖いけれど、家にこもっていないで、外出も旅行もしなければ。痛みも忘れてしまうことだ。

遺産相続

　今年私は六十六歳、来年は寅年で夫は年男、七十二歳になる。夫婦ともにすっかり年をとってしまった。
　ところで、初老というのは、六十歳くらいだと思っていたのだが、辞書を引くと、なんと、初老　①四十歳のこと　②老人になりかけの年頃　とある。四十歳で老人！　なんということだろう！
　四十にして惑わず、昔は人生五十年、四十歳で引退したのだろう。人の寿命は短かった。今は、六十で還暦だが、誰も赤いちゃんちゃんこなど着ていない。若い人たちにまじって町を闊歩している。
　男たちは定年退職してから、二度目の勤めに出ている。うちの夫は会社の相談役をやっていた。六十五歳で完全に退職、以後はゴルフ三昧である。彼に言わせると、定年退職してからが本当の男の人生だそうだ。週に二回も三回もゴルフして、競技会のないときはゴルフ練習場へ行き、そのため腰や足を痛め、接骨院に通っている。接骨院に通いながらでもゴルフしたいのだ。
「ゴルフできなくなったら、どうするの？」と聞いたら、
「死ぬ」という答え。
　しかし死ぬというのはやはり穏やかでなく、近頃は「ゴルフができなくなったら、旅行しよう」と言う。私はそんな先のことでなく、今、旅行したい。もちろん、膝が痛くなったときは、それどころでなく、散歩もせずに、家にいた。これからもいつ膝が痛くなるかわからない…それを思うと、旅行などに行って、旅先で膝痛になったら、と不安である。でも、そんなことばかり考えていたら、何もできない。
　私は母が家庭科の教師だったので、栄養の大切さはとことん教えられて育った。昔は蛋白質を摂りましょう、肉や魚を食べましょう、とかまびすしかった。現在は、野菜を摂りましょう、と言われている。

私は野菜嫌いの夫に、なんとか食べさせようと、いろいろな野菜料理を作ってきた。そのかいあって、夫はなんとか野菜を食べるようになった。ただ、息子の場合は、成功しなかったが。
「食事に注意しなくても、長生きするんだ」と夫は言う。「橋本を見てみろよ」
彼の義兄、橋本谷平氏は、料理は妻に任せず、全部自分で作ってきた。若い頃、結核になって、治ってからも仕事せず、長年主夫をやってきたのだ。その橋本氏の作る献立、ご飯、焼き魚、ただそれだけ。みそ汁はもちろん、野菜も果物も付かない。何十年もその偏った食事をしてきた。
「橋本は、九十六歳まで生きたんだぞ。何も注意しなくても、長生きできるんだ。姉さんが目が悪くなったのは、ビタミン不足からかもしれないけれどな」
ビタミン不足からではないだろうが、義姉は白内障で眼科医に通っている。
夫の姉、橋本房子は、谷平氏の作るご飯を食べて、自分では何もしなかった。六十歳までは近所で内職みたいな仕事をして、なんとか正社員をやっていたが、定年退職してからは、文字通り何もしなかった。
二人は、ろくにおいしい物も食べず、旅行にも行かず、ただ家にいて、静かに暮していた。
生活費は、谷平氏が家の二階を人に貸して、その賃貸料でまかなっていた。義姉、房子の月給や年金は、貯まる一方であった。そして、谷平氏は、昔、親たちが商売をしていて、お金を儲けていたので、それを相続し、貯めていた。
貧しい生活をしていた橋本家の二人。
老人用の弁当が一食六百円する。それを夕食だけ義姉はとっていたのだが、義兄の谷平氏は「六百円は高い」とぶつぶつ文句を言っていた。自分は、チラシを見て、三百円の弁当を買いに行くのだ。
夫が介護の手伝いに橋本家に通っていた。で、いちごとかトマトとか、持って行って義姉に食べさせる。
あるとき、さくらんぼを持って行った。それを出して、谷平氏にも勧めた。
谷平氏はそのさくらんぼを一口食べ、「ああ、こういうおいしいものがあったんですか」と言った。
で、夫は彼がもっと食べるだろうと思ったのだが、彼はその一口だけで、もう食べようとしなかった。おいしい物を食べようという気がないのだ。
そんなにして、貧しい生活をしていた橋本氏だが、亡くなったら、後にすごい財産が残っていた。
二月末に眠るように老衰で亡くなった橋本氏。
彼には子供はなく、兄弟もない。たった一人いた妹は、亡くなり、甥が一人いた。
遺産は、遺言によって、全額妻である義姉、房子が継ぐことになった。継ぐことになったといっても、彼女にはそれはわからない。彼女は義兄の谷平氏が亡くなる前から入院していて、病気も重く、夫たちは彼女に義兄の死は知らせなかった。遺産相続手続きも済まぬまま、三月、姉、房子は帰らぬ人となった。
遺言執行人は義兄、徹がすることになっていた。しかし、その徹も、悪性のガンで闘病中であ

った。
　で、橋本家に介護の手伝いに通っていた私の夫が、遺言執行人の代理となった。
　谷平氏から妻の房子に相続させるのは簡単なのだが、その房子も亡くなったため、彼女の法定相続人に相続させなければならない。房子、徹、夫、……この兄弟は九人もいるのだ。そのうち一人の兄幸造はすでに亡くなって、この人には二人の遺児がいる。法定相続人が九人もいる勘定になる。
　夫は、この九人から印鑑をもらうのに、苦労していた。
　その上、なんと、四月には、徹が亡くなる。この人の分の相続権はどうなるのか……
房子が死んだ時、まだ徹は生きていたので、相続権は徹の妻、芳子と一人息子、達夫が得ることになるという。これでまた法定相続人は十人に増えた。
　法定相続人が多いと、相続税の基礎控除も多くなるので、これは喜ばしいことなのだが、いちいち十人の印鑑をもらうのは大変だった。夫は、毎日、あちこちに出向き、銀行や証券会社に日参して、苦労していた。橋本夫妻は、公社債投信とか個人向け国債とかが多く、証券貯蓄していたのだ。
　証券の分は、それぞれの人に口座を開いてもらって、そこへ移す。銀行預金は、夫がまだ義姉が生きていたとき、毎日キャッシュカードで少しずつおろしていたので、私がそのお金を持って銀行に行き、兄姉たちに送金した。
　銀行員に「そんな大金、どうなさったんですか？」と聞かれたが、ありのままに答えた。
「義理の姉が亡くなって、夫が相続人代表者なので兄姉たちに遺産を分配しているんです」
　それで銀行員の不審は解けた。
　兄姉たち、またその子供たちは、思わぬ大金を手にすることになる。
　特に先に亡くなった義兄、幸造の二人の遺児、太一郎と善次郎であるが、この二人は、橋本夫妻と会ったこともなく、そういう人がいると知ってもいなかったのだ。亡くなった父親の姉が遺産を遺した…とまあこういうわけで、棚から牡丹餅というか、渡りに舟というか、なんと言うか、血縁関係はあるから、法定相続人に間違いはないが、二人が全然当てにしていなかった遺産なのだ。笑う相続人か。
　二人の母親、幸造の未亡人は、もちろん橋本夫妻と接触はあったが、彼女も、六月、ガンで亡くなってしまう。
　太一郎は母親の葬儀にお金を使ったかもしれない。善次郎の方は、それどころでないのだ。カリスマ美容師である彼は、お金持ち相手の美容院を開いていたが、不況のあおりを食って倒産。莫大な借金を抱えてしまった。橋本家からの遺産でもとても返しきれない。すずめの涙である。
　私は夫に頼まれて、相続税の計算をした。東京の橋本家、家屋敷は小規模宅地であるから、大した額にはならない。義姉の相続財産は、約八千万円で、法定相続人が彼女と甥の二人のため、基礎控除が七千万円であるから、少し越えるが、配偶者控除があるので、実際の税金にはならない。しかし税務署に申告する必要はあるので、私が難解な申告書をなんとか書いて出した。
　義姉から夫たち十人への相続財産は、義姉のこつこつ貯めた分も含まれるが、基礎控除一億五千万円にはならないので、これも相続税は払わなくていい。申告する必要もない。
　基礎控除というのは、五千万円に法定相続人一人につき一千万円を加えた額である。

さて、橋本夫妻の住んでいた家、土地はどうなるか……。
家と土地とは夫が相続した。
「あんたたち、ここに住んではどうかね？」と長兄は言ったが、私たちは食指が動かなかった。
土地は、橋本家の隣家が買ってくれることになった。かなりの額にはなるだろう。
しかし、税金はどうなるか…。
家を売ると、自分が住んでいた家ではないから、譲渡税がすごくかかる。で、それを払って、安心していると、後で市県民税がどっとかかる。それも払うと、国民健康保険料がものすごく高額になる。ひどい目にあうのだ。
どうしたらいいのか…。
「十七棟を売ろう」と夫が言った。
私たちは千葉市の団地の八棟に住んでいるのだが、以前、息子が結婚するというので、十七棟の一部屋を買ってやった。それがバブルの頃で、３ＤＫの部屋が二千三百万円もかかった。貯金をはたいて、ローンも組んだ。そんなにしてやったのに、息子はまもなく離婚した。
それでも、息子はそこに一人で住んで、私たちから独立した。これはとてもいいことだった。家に同居していたら、自立できなかっただろう。
今、その家は、値が下がって、三百五十万円くらいになっている。だから、ここを売ると、およそ二千万円もの損失が出て、東京の橋本家を売っても、あまり税金がかからない計算になる。十七棟を買ったときのローンはすでに完済している。
では息子をどこに住まわすかだが、団地の十一棟に亡くなった私の両親が以前住んでいた家があり、そこは人に貸していたが、ちょうど良いことにただ今現在は空き家になっている。そこに息子を引っ越させた。
十七棟は金持ちの中国人が三百七十万円で買ってくれた。リフォームすればもっと高くなるが、リフォーム代がかかるから、同じことである。買う人が好きなようにリフォームすればいい。
こうしてすべて解決した。
橋本家を隣家に売る仕事が、のびのびになっているが、今年中にやっておかないと、また税金に困るので、私はやきもきしている。しかし、橋本夫妻のおかげで、私たち夫婦もお金に余裕ができた。感謝、感激、である。